

ありがとう  
ゼノさん

えとぶん みき せつこ



ありがとう  
ゼノさん

えとぶん みき せつこ



女子パウロ会



一九四五年 八月九日 ながさきに  
原子ばくだんが おとされました。そして  
たった ひとつの この ばくだんで  
ながさきの 町が ぜんぶ もえて  
しまったのです。

その 三日 まえの 八月六日  
ひろしまにも この 原子ばくだんが  
おとされ 町は ぜんめつして  
しまいました。この ふたつの ばくだんで  
何十万と いう 人が しまいました。  
ながさきに 原子ばくだんが  
おとされてから 六日の あと 日本は  
せんそうに まけて しまいました。  
だい二じせかいたいせんと いう  
大せんそうが おわたたのです。  
せかいじゅうの 国々には それぞれ



日本がわに ついたり アメリカがわに ついたり  
して みんな せんそうを して いたのです。  
せかいじゅうで かぞえきれないほど たくさんの  
人びとが しまいました。

とくに せんそうに まけた 日本では、  
かぞくや 家を なくした 人たち おとうさんも  
おかあさんも しんで ひとりぼっちに なった  
子どもたちが たくさん いました。

ながさきに 原子ばくだんが おとされてから 一年  
たちました。みわたすかぎりの やけ野原にも 夏草が  
しげりはじめて います。家を なくした 人たちは、  
トタンやねの こやを つくって すんで いました。  
そこへ 黒い ぼうしに 黒い ふく 白い おひげの  
おじいさんが やって きました。

おじいさんは こやの ほうに むかって 大きな  
声で よびかけました。



「みなさん、おげんきですか。おじいさん、パンもって、きましたよ」  
おじいさんが声をかけた。小さなこやのなかから、子どもたちが  
出てきました。

「わあい、ゼノさんだ。きょうはパンを もって きて くれたぞー」  
この 白い おひげの おじいさんは、カトリック聖母の騎士修道院の  
しゅうどうし ゼノさんです。ゼノさんは、にこにこしながら へんな  
日本語で、いいました。

「さあ、ほうやたち おなか ペコペコでしょ。コッペパン あるよ。アメも  
ある。みんなで なかよく たべましょう」

子どもたちの 手が わーっと のびました。子どもたちは ゼノさんを  
かこんで、ガツガツ パンを たべはじめました。そんな 子どもたちに  
ゼノさんは やさしく はなしかけました。

「ほうや じょうちゃんたち、おじいさん いい はなし もって きたよ。  
ほうやたち、おとうさん いない、おかあさんも いないね。うちも  
ないでしょ。たべる もん ない。わたし ほうやたちの ため うち  
みつけました。いっしょに 行きましょう」

子どもたちの なかで ホスらしい 大きな 子が くち ippaiの  
パンを もぐもぐ させながら いました。

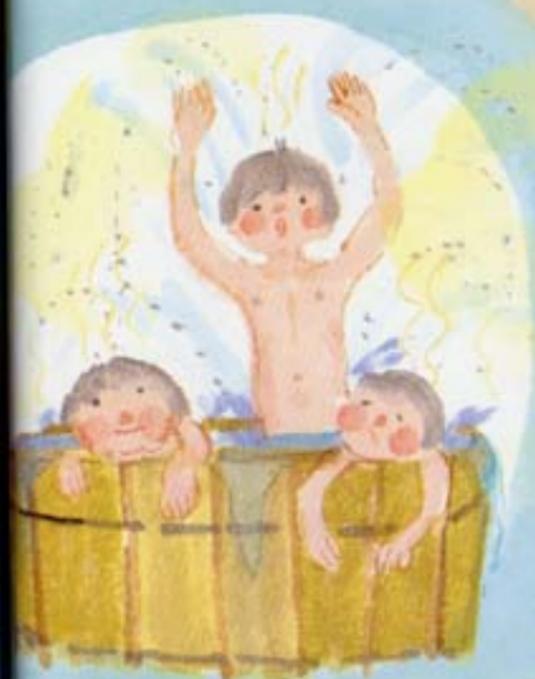
「うそばい そげん ことば いうて おれたちば しゅうようじょへ つれて  
いくとじやろうが。その てには のられんばい。なあ、みんな」

でも、べつの 子が ききました。

「ばってん、そこへ 行ったら おれたち はら ippai めしば  
くえるとか」

「はい、ごはん あります。おふろも あります。ふとんも ありますよ。

よい 子どもたち ほかにも たくさん います。ゼノ うそ、つかないよ」



「おれ はら ippai めしば くいたか」  
「うちも ごはんの たべたかと」

こう になると さすがの ホスも がんばって いられなくなりました。

ホスの きもちも はら ippaiの めしと いう ことばに 大きく  
うごかされたのです。目の まえに やまもりの 白い ごはんが うかんで  
きます。なまつばが 出て きました。



「うん、そんなら 行って やつても よか。なあ、みんな」  
「さんせい さんせい」

「そう、よかった。来て くれますね。わたし ほんとに 来て よかった。  
じゃ すぐ 行きましよう」

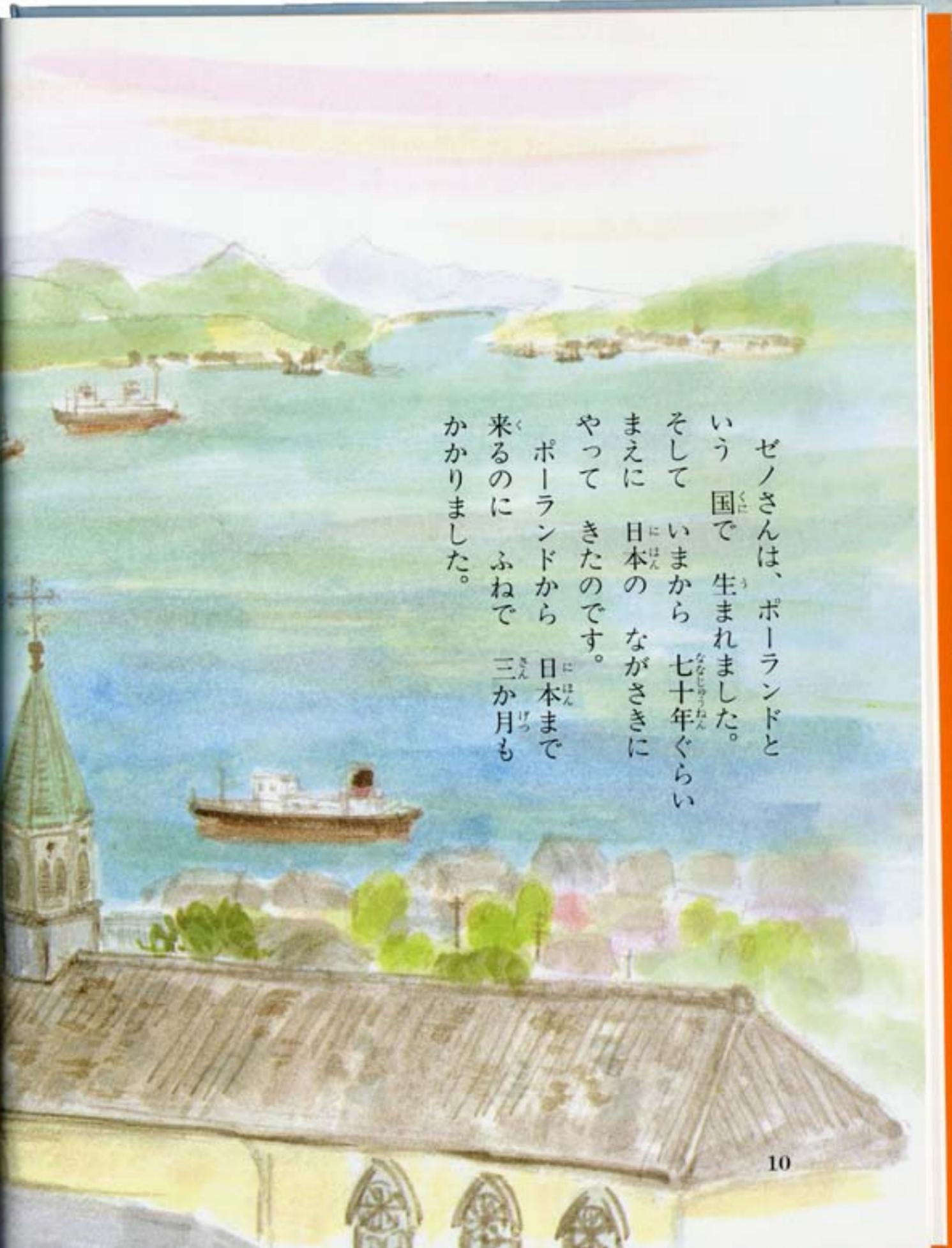
せんそうで おとうさんや おかあさん そして きょうだいたちを  
なくして、ひとりぼっちに なった かわいそうな 子どもたち。

冬の さむさの なかを どのように して すごして きたのでしょうか。  
ゼノさんの やさしい 心は いたみます。

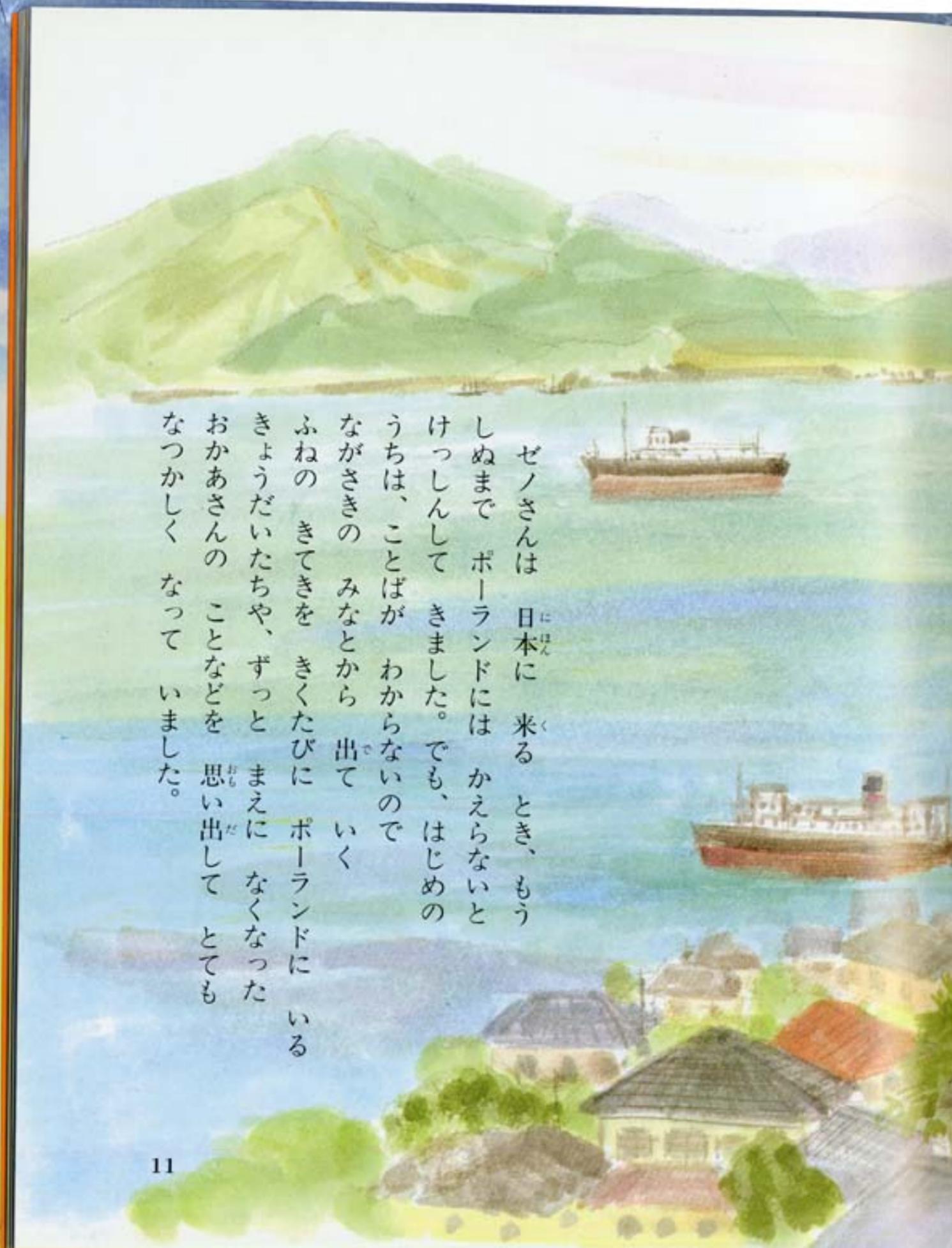
おとなたちから はなれて じゆうに くらして きた 子どもたちは、  
あちら こちらと さまよいあるく くせが あって、なかなか 子どもたちの  
家《聖母の騎士園》に 入ろうと しないのが ふつうでした。

それで、ゼノさんは 子どもたちの きもちが かわらない うちにと 道を  
いそぎます。

ゼノさんを まんなかに して 子どもたちは うれしそうです。  
ゼノさんは せんそうで ひとりぼっちに なった 子どもを あつめて、  
まもって あげる しごとを して いたのです。



ゼノさんは、ポーランドと  
いう国で生まれました。  
そしていまから七十年ぐらい  
まえに日本のながさきに  
やってきたのです。  
ポーランドから日本まで  
来るのにふねで三か月も  
かかりました。



ゼノさんは日本に  
来るとき、もう  
しぬまでポーランドには  
かえらないと  
けっしんしてきました。でも、はじめの  
うちは、ことばがわからないので  
ながさきのみなとから出ていく  
ふねのきてきをきくたびに  
ポーランドにいる  
きょうだいたちや、ずっと  
まえになくなった  
おかあさんのことなどを  
思い出してとても  
なつかしくなっていました。

しゅうどういんに 入る まえの ゼノさんは とても おしゃれでした。じぶんでも かつこいい スマートな わかものだと 思っていました。「わたし ほんとうは ちよっとだけ しゅうどういん 入って あとで きれいな およめさん もらって しあわせに くらす、これ のぞんで いました」

ゼノさんは こういう きもちで しゅうどういんに 入ったのでした。ところが しゅうどういんに 入ると すぐ まるぼうずに され、古くて だぶだぶの ふくを きせられて しまいました。ゼノさんは こんなはずじゃ なかったと、かなしく なりました。そこで しゅうどういんを 出ようと けっしんした ゼノさんは、いんちようさまの ところへ 行きました。

その ときの いんちようさまは、あとで ユダヤ人はくがいの とき、アウシユピツツと いう ところで、ほかの 人の みがわりに なって したんだ マキシミアノ・コルベしんぶさまだったのです。

ところが、しばらくして コルベしんぶさまの へやから 出て きた ゼノさんは、明るい かおを して いました。そして、それから ずっと

しゅうどういんに いるのです。いったい なにが おこったのでしょうか。それは ゼノさんの ひみつなのです。ゼノさんは、この ときの ことは けっして ひとことも しゃべらないのです。





ゼノさんが 家<sup>いえ</sup>に ついた  
とき、おかあさんの  
すがたは どこにも  
みられませんでした。その  
日<sup>ひ</sup>は おかあさんの  
おそうしきの 日<sup>ひ</sup>でした。  
あれほど ゼノさんが  
会<sup>あ</sup>いたかった おかあさんは  
つめたい 土<sup>つち</sup>の 下<sup>した</sup>に  
うめられたばかりだったので。  
ゼノさんの 心<sup>こころ</sup>に、大きな  
あなが あいて こおった  
風<sup>かぜ</sup>が ふきぬけて いきました。  
ゼノさんは 心<sup>こころ</sup>の なかで  
さけんで いました。  
「おかあさん！ マリアさま」



ゼノさんは コルベしんぶさまから  
マリアさまを あいする ことを おそわれました。  
ゼノさんは マリアさまの ごぞうを  
見<sup>み</sup>るたびに やさしかった おかあさんを  
思<sup>おも</sup>い出すのでした。  
ゼノさんの おかあさんは ゼノさんが  
しゅうどういんに 入<sup>はい</sup>る まえに なくなりました。  
ゼノさんは だまって 家<sup>いえ</sup>を 出<sup>で</sup>て、ながい  
あいだ とおくで はたらいて いました。  
ある クリスマス・イヴの  
ことです。ゼノさんは  
きゆうに おかあさんに  
会<sup>あ</sup>いたくなり、いそいで 家<sup>いえ</sup>に  
かえりました。ポーランドの  
冬<sup>ふゆ</sup>は なんでも こおりついて  
しまう ほどの さむさです。